



## 大本山永平寺



### 処暑

今月二十三日は『二十四節気』の一つである処暑を迎えます。

暦便覧には「陽氣とどまりて、初めて退きやまむとすれば也」と著書である太玄斎は述べていますが、江戸時代に比べ現代は気候が温暖に推移して来たためか未だ暑い日々が続いています。

さて、道元禪師ご在世の永平寺と現代の永平寺では生活様式が変わりました。劇的な違いは電気、ガス、水道を用いるようになったことです。

用いることはよいですが、使い放題の生活では道元禪師の修行観に大きく背くことになるでしょう。

道元禪師の教えと戒めを守り修行生活を工夫していけば自ずと「節約」につながるのです。

夏は暑く、冬は寒い。自然の摂理に従う生活を昔と変わらず現在も営んでいます。

しかし、私どもの修行は寒暑の苦しみを課すことが目的ではありません。

夏はわずかな涼を用い、冬は少しの暖を用いて善き環境を整え坐禅に勤しむのです。読者の皆さまも「わずか、少し」を生活の中で工夫されてみてはいかがでしょうか。



## 大本山總持寺



昨年の夏期参禅講座

### 夏期参禅会 祖跡巡拝

大本山總持寺には、八月ならではの恒例の行持があります。一つは、夏期参禅講座です。本年は八月三十一日から九月二日にかけての三日間の実施となります。本山の講師に加え外来講師をお呼びし一般の方がたにわかりやすく禅をひもときます。また坐禅も衆寮しゅりょうを使用しての本格的な修行となります。今年で三回目となりますが、毎年参加者が五十名を超える人気講座となっています。毎年テーマが決められ、本年は「私たちの報恩」というテーマで行われます。

もう一つは祖跡巡拝です。二泊三日の予定で、本山の修行僧たちが總持寺ゆかりの土地を訪問します。かつて總持寺は能登にあったために、祖師方の足跡の多くは、北陸にあります。特に、かつての總持寺の寺域に建つ大本山總持寺祖院、瑩山禪師が最初に開かれた永光寺には、毎回必ず訪問します。本山は平成二十七年に總持寺発展の基を築かれた第二祖峨山禪師さまの六五〇回大遠忌を迎えます。禪師は、晩年住職として總持寺と永光寺の二カ寺を兼務され、およそ六十キロもの距離を毎日のように歩いて移動されたと伝えられています。「峨山道」と今日命名されているその道の一部を、皆で歩くのも恒例となっています。その他の行程は、年ごとに少しずつ変更されます。修行僧たちにとって、報恩の意味を知る尊い三日間の巡拝です。

## 困難を解き合ふには夜の短

岐阜県 北洞 武

評 二人の間に起きた捨ててはおけぬ心のすれ違い、誤解。互いに、ほどきあうにはこの短夜、時間が足らないと作者は叫ぶ。「困難を解き合ふ」に真摯な心のあり処が見える。

## 旅の如入院準備月朧

広島県 岡村 憲謔

評 折しも外は、おぼろ月。まるで明日の旅支度のように、そして今夜の月のように淡々と。病名もわかっている。心は座っているのだ。入院をさらりと詠んで成功。

◆夕蛙大合唱のどまん中

長野県 下島 博

◆手を拭いて祖母も加はり武具飾る

神奈川県 大竹のり子

◆縁日のうごんは温し花曇

愛知県 松井 眺美

◆菩提寺の桜見にゆく浴びにゆく

栃木県 小村 翠香

◆椴の芽を採りにおいでといふ便り

愛媛県 井上 征郎

◆はしやぎし子ころりと寝付く花籠

和歌山県 田崎よし子

◆芹の束解けば広がる故郷の香

愛知県 田中 澤子

◆菜の花の畑に母が揺れている

福島県 大槻 弘

◆葉桜や瓦礫の奥の波の音

岩手県 鈴木 道昭

◆湧き水の流れの稚魚や花菖蒲

宮城県 木村とみ子

◆眺めると跳ねし蝦蛄より買ひにけり

山口県 糸山 栄子

## \*選者吟

夏夜とは禅林の杉のこと

五灰子

## \*作句小見

先月号のこの欄で大本山永平寺に三人句碑があります、とご紹介しました。

永平寺第七十三世貫首熊澤泰禪（雪庵）

高濱虚子・伊藤柏翠の各師です。

五月末花鳥全国俳句大会があり永平寺の句碑のお墨入れをいたしました。新緑の風の気持ちの良い日でした。

# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

我もまた地籟ちらいのひとつ息をする背伸ばし鋏  
を持つ手休めて

大阪府 西口 節子

評 地籟とは地上に起こる音のこと。対する天籟とは天地自然の音。人籟という語もあるらしいので、人の発する音はこれに当たると思うが、作者は自らを他の動物たちと同じ目線で捉えて詠っているように思う。そこに惹かれる。

「雑草と言う草は無し」昭和帝の御言葉う  
れし 庭は華やぐ

埼玉県 山路 昌弘

評 雑草とは人間から見た草の捉え方で、雑草もまた懸命に命をつなぐ。生物学者だった昭和天皇がいみじくもその真理を指摘された。名も知らぬ草花に占拠された庭を愛でる作者。

◆送られておくりて白き春日傘家の前まで来てしまひたり

東京都 長谷川 瞳

◆棠たわに死ねるように手術をすと言う最期は家で迎えたい  
人の

山口県 浜田 道子

◆どの風が吹かば海原越ゆるかをアサギマダラの翅は知り  
をり

福岡県 三吉 誠

◆花まつりはさみて母と妻の忌を訪えば菩提寺にさくらほ  
ころぶ

三重県 小阪 晋

◆言葉強き妻との静い胸の荷を一鋏一鋏打ち消す荒田

愛知県 小久保左門

◆ケータイもパソコンからも放たれて昭和に戻る黄金週間

東京都 野村 信廣

◆水無月は亡夫まふ生れし月逝きし月むらさきの花咲きそろふ  
月

東京都 岡崎千賀子

◆ししむらに触れてみもせで内科医はパソコン見つつ症状  
を言ふ

福島県 齋藤 昭

◆鯉のぼりあまた泳げるその下を子らが元氣に舟下りする

北海道 吉田 洋子

◆母さんとなかなか呼べず母ちゃんおんちゃんは逝つてしまへり母ち  
やんのまま

東京都 石場くに子

## \*選者詠

着飾りてちやぐちやぐ馬こやってくる水張  
り田にあかき色映しつつ

ちづ

## \*作歌小見

「ちやぐちやぐ馬こ」が練り歩く祭は岩手の初夏の風物詩。  
「ちやぐちやぐ」の名の由来は、衣装に付けた鈴が馬の歩調  
に合わせて鳴ることに拠るそうです。宮沢賢治はその短歌で  
「ちゃんがちやが」とその鈴の音を表現しています。